

5領域を重視した指導の計画と実践

－カリキュラム・マネジメントの確立に向けて－

増田 吹子*, 早瀬 勇介**

Teaching Plan and Practice with Emphasis on Five Fields
－ For Establishment of Curriculum Management －

Fukiko Masuda* and Yusuke Hayase**

保育の質の向上が求められる中、幼稚園教育においても組織的な計画の立案・教育の実施・評価と改善が求められ、平成29年3月に告示された幼稚園教育要領には新しくカリキュラム・マネジメントという言葉で示された。幼稚園教育の現場では、様々な方法で教育内容の改善が試みられているが、幼稚園教育の基本に立ち返り幼稚園教育要領に丁寧に沿った教育を行うことが重要であると考えられる。そこで、本稿では5領域を重視した教育を行い成果を上げた幼稚園の教育内容を採り上げ、子どもの成長の姿とその要因、今後の課題について検討し、教育内容を改善するための方策について考察した。その結果、5領域を重視した教育は一定の成果をあげていることがわかった。一方で、教育カリキュラム・マネジメントの確立に向けては、評価システムの確立が今後の課題となることが明らかになった。

Key Words: カリキュラム・マネジメント, 5領域, 指導計画, 異年齢交流,
お店屋さんごっこ

(Received September 11, 2017)

1 目的

平成29年3月に新しい幼稚園教育要領が告示された。この中で、第1章総則において新しく「幼稚園教育において育みたい資質」及び「能力及び幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」、いわゆる「3つの資質・能力」「10の姿」が示された。しかしながら、その教育内容については現行の幼稚園教育要領における5領域のねらい及び内容をほぼ踏襲したものとなっており、今回の改訂は幼稚園教育の内容を大きく変更するものではなく、目指すべき方向性をより明確にしたものと考えられる。また、現行の要領では、教育課程の編成について「第1章総則 第2 教育課程の編成」に3つの項目が示されているが、新要領においては、「第1章総則 第3 教育課程の役割と編成等」に6つの項目にわたってより詳細に示された。また、第3章に位置づけられ

* 鹿児島純心女子短期大学生生活学科 子ども学専攻 (〒890-8525 鹿児島市唐湊4丁目22番1号)

** 鹿児島おおとり幼稚園 (〒890-0013 鹿児島市武岡4丁目16-1)

ていた「指導計画作成にあたっての留意事項」が第1章総則の中に「指導計画作成と幼児理解に基づいた評価」として位置づけられ、「第1章総則 第6 幼稚園運営上の留意事項」には「カリキュラム・マネジメント」という言葉が新しく示された。これらのことから、今回の改訂においては教育課程の編成・指導計画作成がより重要視され、教育の改善に通じる評価の重要性が強調されているといえる。また、中央教育審議会答申「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（平成28年12月21日）」において、カリキュラム・マネジメントを捉える側面として「各領域のねらいを相互に関連させ、『幼児期の終わりまでに育ってほしい姿』や小学校の学びを念頭に置きながら、幼児の調和の取れた発達を目指し、幼稚園等の教育目標等を踏まえた総合的な視点で、その目標の達成のために必要な具体的なねらいや内容を組織すること」が示されたように、単にPDCAサイクルを確立するだけでなく、幼稚園教育要領に示された5領域のねらいを重視することも求められる。

したがって、今後の幼稚園教育においては、従来通り5領域のねらい・内容を踏まえつつ、教育の目指す方向性を明らかにしながら、反省・評価を反映させた教育課程・指導計画に基づいた教育を行うことがより求められると考えられる。

そこで、本稿では、5領域を重視した教育を行っている幼稚園の特色ある取り組みを手がかりに、幼稚園教育において5領域を重視することの妥当性について検討し、さらに5領域を重視した取り組みの「3つの資質・能力」「10の姿」へのつながり、また教育内容を改善するための教育課程・指導計画のあり方について検討することを目的とする。

尚、本稿における「幼稚園教育」には「幼保連携型認定こども園における満3歳以上の幼児の教育」を含むものとする。

2 5領域を重視した教育

鹿児島市にある〇幼稚園では、今回の幼稚園教育要領改訂以前から5領域を重視した教育を行っている。その内容及び成果について紹介する。

(1) 教育内容の改善への取り組み

〇幼稚園では、数年前に保護者から「園の特色は何か」と尋ねられたことをきっかけに、教育内容の見直しを図り、幼児期は「知・情・体」をバランス良く育てることを重視し、教育内容の基本となる幼稚園教育要領に示されるねらいと内容（5領域）に忠実に教育を行うことを目指した。IT化が進む社会の中でコミュニケーション力を育てる必要性を感じており、人間関係はもちろんのことコミュニケーションの手段である言葉を大切にしたいという考えもあり、従来よりもさらに5領域を重視する教育内容に転換したのである。

まず、園内で幼稚園教育要領についての勉強会を実施し、要領についての理解の深化を図った。さらに、指導計画作成の際には教育課程と長期計画、短期計画の関連性の明確化をより強く意識した。また、入園動機アンケートや全保護者対象の学校評価を次の教育課程・指導計画作成に生かすことに取り組んだ。これらは、平成29年改定の幼稚園教育要領に示されたカリ

キュラム・マネジメントに通じる考え方であるといえる。

(2) お店屋さんごっこの活動を通じた異年齢交流の取り組み

〇幼稚園の取り組みの中でもっとも注力しているものに、異年齢交流の活動があり、各学年の年間計画とは別に3～5歳児共通の異年齢交流の年間計画を立案している。年度の前半はクラス内でのかかわりが中心となるが、その中でも年長児が年少児クラスに行って一緒に給食を食べる等、生活の中で異年齢児とかかわるような活動を取り入れている。また、遠足や七夕祭り等の行事を通して少しずつ異年齢でかかわる機会を重ね、保護者をお客さんとして招き園全体で取り組む行事として年長児・年中児混合のグループでの活動となる「お店屋さんごっこ」が行われる。教育内容を見直した結果、従来の商品を売り買いするというお店屋さんごっことは異なる内容に変更し、「様々な人々とのコミュニケーションを図り、協力・共同して物事に取り組む」という異年齢交流のねらいの達成を図っている。

平成28年度は保護者をお客さんとして迎えるお店屋さんごっこ（本番）が2月15日～17日の3日間に行われ、その準備の活動が1月に始まった。4月から少しずつ異年齢でかかわる経験を重ねてきたが、中でも9月に行われた「おばけやしき」のごっこ遊びはお店屋さんごっこの活動につながるものとして位置付けられる。おばけやしきの活動では、年長児がおばけになって年中児・年少児を招待するだけでなく、年中児・年少児にもバックヤードを見せたり驚かせる側になる経験を少しできるようにしたりしている。このような活動を通して、年長児には年長としての自覚やリーダーシップ、年中児・年少児は年長児への憧れの気持ちが芽生え、その中でお店屋さんごっこの活動が始まるという流れになっている。

お店屋さんごっこでは年長児・年中児合わせて20名ほどのグループに担当の教員を配置し、約1ヶ月間かけて週に2～3回（1回あたり30分～1時間）、計10回ほど準備のための活動を行う。幼児のグループは、教師の話し合いにより、子ども同士の間関係や製作活動における意欲や態度、コミュニケーション力等を考えてある程度均質化するように決められる。〇幼稚園でのお店屋さんごっこでは飲食店をすることになっており、お店屋さんごっこ当日は各クラスがカレー屋・カフェ・中華料理店などのお店になり、園全体がフードコートのようなになる。作った物を売るのではなく、お客さんが来店すると子ども自身が自分達で決めた役割分担に則ってお客さんの前で材料を調理するまねごとをし、出来上がった料理を提供するシステムとなっている。提供する料理は、幼児の意欲を高めるためにより本物に近く見えるよう教材研究を重ねる。お店屋さんごっこの本番は3日間にわたって行われ、初日に年少児の保護者、2日目に年中児の保護者、3日目に年長児の保護者がお客さんとして来店する。毎日の開店時には来店した保護者に向けて、各店のリーダーの幼児が店舗紹介を行う。お客さんである保護者が来店すると、受付の幼児がチケットを受け取り調理する幼児に注文を伝え、調理する幼児は材料を切ったり混ぜたりして盛り付けたものをお客さんに渡す。調理の工程も、例えばアップルパイであればパイ生地を切る子ども・ジャムに見立てたスライムを刷毛で塗る子どもというように役割分担ができており、各自が自分の役割を全うするために真剣に活動に取り組む姿が見られる。

この活動も、教師は5領域を意識しながら行うよう留意しており、保護者向けのおたよりで

は、お店屋さんごっこのねらいを「1 言葉：お客さんや友だちと様々な言葉を交わす」「2 表現：店員さんになりきって遊ぶ」「3 人間関係：人と人とのかかわり」と紹介している。

(3) 改善の結果

前述のような取り組みを経て、本園では子ども・職員・保護者に目に見えた変化が現れるようになった。

まず、自分達で考えてやろうとしたり積極的に活動に取り組んだりする子どもの姿が多く見られるようになった。例えば、ピアノの練習をする際に列に並んで練習すると次の日から教師がピアノの練習を始めると伝えただけで自分達で並ぶようになる。体操の際には前に出て教師役をやりたがる幼児が増えた等である。また、描画の中に友達を多く描く幼児が増えたことから、以前より仲間意識が芽生えていることが窺える。詳細は年長児の事例として後述する。

次に、教師の教育に対する意欲の高まりが見られるようになった。幼児が成長する姿を見ることで、幼児により豊かな経験をしてほしいという願いが大きくなり、以前より教材研究に熱心に取り組むようになっていく。その結果、自ら何を提供しようかと考えてアクションを起こす姿が多く見られるようになった。

さらに、幼児の家庭での話の内容やおたよりの内容から、幼児の園での活動はただ遊んでいるのではなく学びにつながっているということを知り、連絡帳に書く保護者が見られるようになった。園の教育内容への評価の高まりは園児数の増加に顕著に現れている。特に子どもの数が増えた地域ではないにも関わらず、園児数（3歳児から5歳児の合計人数）は平成21年度の78名から平成22年度は175名に増えており、地域での園の評価が高まっていることがわかる。

3 お店屋さんごっこに見られる子どもの育ち

ごっこ遊びは、多くの幼稚園・保育所・こども園で日常的にみられる遊びであり、「自分の思いを表現しながら、物や人と関わり、自分の世界を広げていくことができる、自由感にあふれた魅力ある遊び」（神長，2017）である。保育実践におけるごっこ遊びの意義や援助のあり方については、従来様々な研究者が言及している。神長（2017）は、「子どもたちは、ごっこ遊びの中で、言葉や人間関係、環境との関わりや表現など、様々なことを学んでいます。『幼児期に必要な学びは、全てごっこ遊びの中にある』と言っても過言ではありません。」と述べている。また、河崎（2015）は、ごっこ遊びについて「自由な憧れと想像が、場における物と人との格闘・協調を通して、新しい自分への拡張という喜びを生み出す」と述べている。このように、ごっこ遊びは子どもにとって楽しい活動であるだけでなく、子どもの成長につながる活動であるといえる。

そこで、0幼稚園のお店屋さんごっこの活動を通して成長する子どもの姿を、年長児の2つの事例から検討する。

(1) 思いを言葉にするようになったA

A（5歳児・女兒）は穏やかな性格で友達とのかかわりも問題なく、製作を得意としており

器用で工夫を凝らした作品を作ることができるが、自信のなさから自分の思いやアイデアを言葉にすることが難しかった。お店屋さんごっこでAのグループを担当することになった教師は、活動が始まった当初「自分の考えを友達に伝え認められることで、考えを共有する喜びを味わってほしい」という願いをもっていた。

①初回の活動時

年長・年中を交えたグループのメンバーの顔合わせを行った。その中で教師からリーダーの役割について具体的な説明があり、次の活動時にリーダーを決めることが伝えられた。Aはリーダーになりたいと思っているようだったが、他にもなりたいたいと言う子どもがいたため、悩んでいる様子であった。個別で話をすると「リーダーをしてみたい」という気持ちがわかったが、次のリーダー決めの際には立候補しないことが予想されたため、教師はAの負担にならないような後押しをしたと考えた。

②2回目の活動時

予定通りリーダー決めを行った。Aは教師が予想していた通り、自分の思いを抑えていたが、教師の後押しもあり立候補するに至った。しかし、他に4名の候補者がおり、話し合いは平行線を辿りリーダーがなかなか決まらずにいた。教師は幼児達にどうしたらいいか問いかけ、子ども達自身でリーダーを決める方法を考えるように促した。すると、ある幼児が5人の中から誰が良いかを皆で選ぶことを提案した。そこで、教師はリーダーの仕事内容を再度説明し、ただ選ぶのではなく選んだ理由を話すよう提案した。その結果、子ども達から「最後まで頑張ってくれそう」「年中さんにも優しくしてくれそう」等の意見が挙がり、リーダーはAに決定した。Aは恥ずかしそうにしながらも、とても誇らしげな様子であった。

③3回目以降の活動時

他の子ども達に言いたいことが伝わらない等の葛藤を経験しながらも、リーダーを任された使命感から、他の幼児を整列させて点呼を取ったり、進んで自分のアイデアを提案したりするなど、責任を果たそうとする姿が見られた。

④お店屋さんごっこ本番（1回目）

お店屋さんごっこ開始時に、リーダーは保護者に向けて店舗紹介を行う。教師の提案によりリーダーが話す紹介文は子ども達自身が考えていた。Aは緊張しながらも店舗紹介を無事に終えることができた。その後、初めて保護者を招いての開店では、Aも含め戸惑う幼児の姿があった。Aはアップルパイの生地を細長く切る仕事を担当していたが、次々と保護者が来店するため、同じ担当の幼児から「急がないと間に合わない」と急かされていた。今までのAであれば黙り込むところであったが、今回は「きれいに切ることも大事だよ」「おいしそうに見えないもん」と自分の思いをはっきりと伝えることができていた。初日を終えたときには、とても満足そうな様子であった。

このように、お店屋さんごっこの活動を通して自分の思いを言葉にするという面でのAの成長する姿がはっきりと見られた。リーダーとしての責任を果たすために人前で言葉を発する機会を得たこと、また他の子ども達から認められリーダーに選ばれたことや保護者の前で店舗紹

介ができたことで自信をもてるようになったこと等がAの成長につながったと考えられる。これは、教師がAに自信をつけてほしいという願い(ねらい)をもち、Aへの直接的な働きかけやグループの子ども達全体に対する問いかけを通して、Aが自信をもてるような経験をできるように指導したことによるものでもある。

(2) 人とのかかわりが難しいB

B(5歳児・女児)は知的障害・自閉症スペクトラム特性、精神年齢は3歳6か月と診断されている。年長児クラスに4月に入園し、それ以前は家庭保育で育った。クラスでは担任の他に補助教員1名が付いている。園では他児と同じように活動するが、状況に応じて個別の活動に移行している。お店屋さんごっこでBがいるグループを担当することになった教師は「他者とのかかわりを深め、他者とのやり取りを楽しんでほしい」「自分なりに活動に参加し、達成感を味わえるようになってほしい」という願いをもっていた。

①初回の活動時

初めての活動、普段と違う教室であることに対してはあまり戸惑いはないようだったが、落ち着きがなく、教室内を手を叩きながら歩き回っていた。初回の活動時に緊張を和らげるために行うレクリエーションには参加せず補助教員と一緒にいた。自己紹介の際には、自分の名前は言ったが他児の紹介は聞いていなかった。

担当教師は、Bは他児とのかかわりの前に担当教師とのかかわりを深め信頼関係を築く必要があること、Bの実態に合った活動を準備しながら他の子どもや異年齢の交流もできるような配慮をすることを今後の課題と考えた。また、全体の目標に加え、Bにあった個別のねらいの設定が必要であると考え「友達とかかわる楽しさを味わい、カフェやさんの一員ということを意識する」「本児なりに活動に参加し、達成感を味わえるようになる」の2点をお店屋さんごっこにおけるBのねらいとした。

②3回目の活動時

担当の教師に慣れつつあり、問いかけにも答えるようになった。この日はトイレトペーパーを千切る活動を行ったが、この活動はBに合っていたようで、活動に集中して黙々と千切り、教師に「たくさんちぎれた」と笑いながら見せに来る様子も見られた。

補助の教師には、Bが甘えてしまわないようBのことはできるだけ見守り、他の子どもの援助を行うようにしてもらった。Bは前述のAと仲が良く、Aも進んでBと関わる様子が見られるので、BとA、さらに年中児でグループにして活動できるようにした。初めはAとばかりかかわっていたBも、Aを介して年中の幼児と目を合わせる、笑い掛けるなどの変化が見られるようになった。普段の年長児クラスの中では周りの子ども達がBのことをお世話するという関係になっていたが、年中児はBにそのような気を遣わないため、Bと年中児の間で物の取り合い等で衝突する場面もあった。その際に担当教師は他の子どもとのかかわりが増えたことによる衝突と判断し、できるだけ見守るようにしていた。物の取り合いでは、交替できる時とできなくて泣いてしまう時があるが、Bにとってはクラスの中では経験することが少ない葛藤を経験する機会になっていた。

③10回目の活動時

Bは絵の具等で作ったコーヒーにマシュマロに見立てた梱包材を乗せる係として、調理の練習に取り組んだ。自分の係を楽しみ、コーヒーを注ぐ子どもからカップを受け取ると丁寧にマシュマロを乗せていた。隣の子どもがコーヒーを注ぐ様子を楽しそうに眺め、こぼさずに注ぐと笑顔で拍手をして褒めるような仕草を見せた。また、他児と同様に「いらっしやいませ」などの掛け声を練習すると、意味がわかっていたかは不明であるが決められた言葉は上手く言うことができていた。

担当教師は同じお店の店員である友達を意識できるよう、他の子どもの様子に気付けるような声掛けを行った。マシュマロを乗せるという単純な作業であったが、黒いコーヒーの上に白いマシュマロが乗ると見た目にも変化が明らかになり華やかになるため、Bも喜んで取り組んだ。楽しくなると本来は1個乗せるべきところを2〜3個乗せることもあったが、Bの気持ちに任せそのままにした。また、言葉が少しずつできるようになったので、その姿を認めた。

④お店屋さんごっこ本番（3回目）

張り切って取り組んでいる。本番は衣装を着用したことで、店員になりきっている様子であった。一生懸命練習したマシュマロ乗せも滞りなく取り組んだ。慣れてくると、周りの子どもにも意識が向き、指をさしながら「Bもこれをやりたい」と発言し、他児が持っているアイスクリーム機のディッシャーを取ろうとして衝突した。周りの子ども達から「勝手に取ったらだめだよ」と諭され、少し泣いたが、自分の気持ちに折り合いをつけ返していた。最終的に、他児にも色々な担当に取り組めるようにしたかったこともあり、担当の変更を行いBもアイスクリームやトッピングの担当も経験できるようにした。Bの母親が来店した際には、とても嬉しそうな表情で「いらっしやいませ」と声を掛け、調子を崩すことなく最後まで係の仕事を全うした。

担当教師は、Bが自分なりに違うこともしたいという意欲を表したので、できる限り汲み取るようにした。他児との衝突の際には、子ども達自身がBに声を掛けたり、Bが自分で納得しようと折り合いをつけたりする姿を見て、声を掛けず見守るようにした。

お店屋さんごっこの活動の中で、担当の教師は友達とのかかわりが難しいBに対してどのような援助をするか試行錯誤した。活動を開始した当初は、他の子どもと同じように活動できるようにしたいという思いがあった。しかし、そのことがBにとって負担になっていることに気付き、Bの個別のねらいを立てたことにより、教師自身が余裕をもってBとかわることができ、過干渉になることを防ぐことができた。活動の前半は、Bにとっては慣れない環境で今までとは違う人間関係の中での活動であるという緊張もあり言葉が出にくかったが、慣れるにつれて発語が増えた。お客さんとして訪れる保護者への声掛けは難しいようであったが、本番が3回目になるとそれができるようになった。係の仕事は、コーヒーにマシュマロを乗せるという単純なものであったが、隣の子どもからコーヒーを受け取るという流れが、他者を意識するきっかけになったと思われる。このように、特に言葉・人間関係の面で、Bの大きな成長が見られた。

(3) お店屋さんごっこを通した子どもの育ち

前述のAは比較的器用で園生活においてあまり問題を抱えているタイプはなく、Bは自閉症的な特性をもっている。このように、まったくタイプの違う2人の子どもの事例を検討したが、お店屋さんごっこの活動を通してどちらもそれぞれに成長していることが明らかである。中でも、前述の2名は人間関係・言葉における成長が著しい。これらは普段の生活や遊びの中でも育つものであるが、あえて異年齢交流の場を設け、保護者が園に来る行事という「ハレの日」を設定することで、より成長に結びついたと考えられる。

このような子どもの育ちは、おたよりを通じて保護者に伝えられている。平成28年度のお店屋さんごっこの様子を伝えるおたよりから、子どもの育ちを伝える部分を抜粋する。

1【言葉：お客さんや友だちと様々な言葉を交わす】

一般的なお店屋さんごっこでも、人とかかわりも多く発生し、店員さんになりきって活動もできます。数年前までは、O幼稚園のお店屋さんごっこもこのスタイルでした。しかし、フードコート式のお店屋さんごっこでは、発生する言葉の数が段違いです。「いらっしゃいませ」に始まり、「おすすめは～」「〇〇と〇〇どちらがよいですか？」など、一方通行ではなく、きちんとお客さんや子どもたち同士で言葉のやりとりができるようになります。

2【表現：店員さんになりきって遊ぶ】

(前略) 実は、この疑似体験＝ままごと遊び、ごっこ遊びは、子ども達が行う遊びの中でも、とても高度な遊びなのです。(中略) 子ども達は自分の役割を精一杯果たし、かつお客さんにも多くの言葉をかけてきたと思います。もちろん最初からお客さんとのやり取りや、活動がスムーズにできていたわけではありません。準備から、本番を数回重ねることで少しずつできるようになります。

3【人間関係：人と人とかかわり】

O幼稚園のお店屋さんごっこは、異年齢交流で行う活動なので、学年もクラスも違う友達と人間関係を形成します。初めは、ぎこちなかった会話も、最終日には初日の様子が嘘のよう！楽しそうにやり取りをしていました。「この子たち本当にお店を始められるかも…」と思うほど、チームワークもお客さんとのやり取りも板についていました。今回の経験を通して、友だちの役に立てた喜び、お客さんの笑顔を感じながら、【人の喜びのために何かしたい】と思えるようになってほしいという教師の願いもありました。

このように、お店屋さんごっこの活動を通して言葉のやり取り・自分の役割を果たそうとする意欲・チームワーク等が育っていることがわかる。ここには主なねらいとして、言葉・表現・人間関係の3つを挙げ、その育ちについて紹介しているが、より本物に近いものを提供することから子ども達は多様な素材に触れることになり、5領域の環境にも関連した活動になっている。例えば、アップルパイは小麦粉で作った生地紙粘土で作ったりんごをのせ、ジャムに見立てたスライムを塗り粉砂糖に見立てた石灰を振りかける。このように普段の製作活動とは違

う素材とのかかわりは、素材の性質や色・形等への興味を促すと考えられる。また、異年齢児や保護者といった人とのかかわりの中で言葉が育っているというように、5領域が相互に関連しながら総合的に成長を支えている。

(4) 「3つの資質・能力」及び「10の姿」の育ち

前述のように、〇幼稚園の5領域を重視した教育は一定の成果を上げているといえる。ここでは、その成果を平成29年度改定の幼稚園教育要領第1章総則における「幼稚園教育において育みたい資質・能力」「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」の点から検討する。

お店屋さんごっこの活動を通して、役割を果たしながらより良いお店屋さんを作ろうとする子ども達の姿から「幼稚園教育において育みたい資質・能力」の「(3)心情、意欲、態度が育つ中でよりよい生活を営もうとする『学びに向かう力、人間性等』」が育っているといえる。

また、Aがリーダーとして責任を果たし、活動の中で自分の思いを言葉にするようになった姿からは「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」の「(2)自立心：身近な環境に主体的に関わり様々な活動を楽しむ中で、しなければならぬことを自覚し、自分の力で行うために考えたり、工夫したりしながら、諦めずにやり遂げることで達成感を味わい、自信をもって行動するようになる」「(9)言葉による伝え合い：先生や友達と心を通わせる中で、絵本や物語などに親しみながら、豊かな言葉や表現を身に付け、経験したことや考えたことなどを言葉で伝えたり、相手の話を注意したりして聞いたりし、言葉による伝え合いを楽しむようになる。」という姿が育っていることがわかる。また、Bが他者を意識しながら活動に参加し、友達とのかかわりを通して自分の気持ちに折り合いをつける姿からは「(3)協同性：友達とかかわる中で、互いの思いや考えなどを共有し、共通の目的に向けて、考えたり、工夫したり、協力したりし、充実感をもってやり遂げるようになる。」「(4)道徳性・規範意識の芽生え：友達と様々な体験を重ねる中で、してよいことや悪いことがわかり、自分の行動を振り返ったり、友達の気持ちに共感したりし、相手の立場に立って行動するようになる。また、きまりを守る必要性が分かり、自分の気持ちを調整し、友達と折り合いを付けながら、きまりをつくったり、守ったりするようになる。」という姿が育っていることがわかる。(下線筆者)

このように、〇幼稚園において5領域を重視した教育により「幼児期において育みたい資質・能力」「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」の育ちが支えられている。これらは「第2章に示すねらい及び内容に基づく活動全体によって育むものである」とされているように、〇幼稚園の5領域を重視するという教育は幼稚園教育要領に沿いながら子どもの発達を助長するものになっているといえる。

4 指導計画と幼稚園教育要領の関連

(1) 指導計画と幼稚園教育要領の関連

前述のように〇幼稚園の取り組みを通して、子どもが成長する姿が見られるが、このような取り組みの根底にあるのは5領域を重視するという園の教育に対する考え方である。

そこで、〇幼稚園の5歳児の年間計画を例に、年間の目標・お店屋さんごっかが行われるⅣ

期のねらい・Ⅳ期の中でお店屋さんごっこの関連が深いもの・異年齢交流年間計画と現行の幼稚園教育要領の関連を確認し、5領域を重視するという考え方に基づいて指導計画が立案されているか検討する。

①5歳児の年間目標

年間目標	幼稚園教育要領
・友だちとのかかわりを深め、思いを伝えあいながら遊びを広げる。	人間関係 ねらい (2) 身近な人と親しみ、かかわりを深め、愛情や信頼感をもつ。 言葉 ねらい (2) 人の言葉や話などを良く聞き、自分の経験したことや考えたことを話し、伝え合う喜びを味わう。
・自分の目標に向かって努力し、積極的に様々な運動や遊びをする。	人間関係 内容 (4) さまざまな遊びを楽しみながら物事をやり遂げようとする気持ちをもつ。 健康 ねらい (2) 自分の身体を十分に動かし、進んで運動しようとする。
・就学に向けて、基本的な生活習慣や生活経験をを通して、自分の思いや感じたことを言葉にして伝え合う。	健康 ねらい (3) 健康、安全に必要な習慣や態度を身に付ける。 人間関係 内容 (6) 自分の思ったことを相手に伝え、相手の思っていることに気付く。 言葉 内容 (2) したり、見たり、聞いたり、感じたり、考えたりしたことなどを自分なりに言葉で表現する。

②5歳児Ⅳ期の計画

Ⅳ期のねらい	幼稚園教育要領
・ひとりひとりが自分らしさを大切に、互いを認め合い遊びや生活を進め充実する。	健康 ねらい (1) 明るく伸び伸びと行動し、充実感を味わう。 人間関係 内容 (7) 友達よさに気付き、一緒に活動する楽しさを味わう。
・自分の思いや感じたことを豊かに表現し、いろいろな活動に取り組み成長を喜び合う。	表現 ねらい (2) 感じたことや考えたことを自分なりに表現して楽しむ。 言葉 ねらい (2) 人の言葉や話などをよく聞き、自分の経験したことや考えたことを話し、伝え合う喜びを味わう。

Ⅳ期の内容	幼稚園教育要領
・クラスやグループの中で役割を受け持ち、目的を持って遊びや生活を進める。	人間関係 内容 (4) いろいろな遊びを楽しみながら物事をやり遂げようとする気持ちをもつ。 人間関係 内容 (8) 友達と楽しく活動する中で、共通の目的を見いだし、工夫したり、協力したりなどする。

・異年齢の友達とのかかわりを深め、就学に向けても自信を持つ。	人間関係 ねらい (2) 身近な人と親しみ、かかわりを深め、愛情や信頼感をもつ。
・感じたこと、想像したこと、感動したことなどを伝え合う。	言葉 ねらい (2) 人の言葉や話などをよく聞き、自分の経験したことや考えたことを話し、伝え合う喜びを味わう。

③異年齢交流年間計画

ねらい	幼稚園教育要領
・様々な人とのコミュニケーションを図り、協力・共同して物事に取り組む	人間関係 内容 (8) 友達と楽しく活動する中で、共通の目的を見だし、工夫したり、協力したりなどする。

Ⅳ期のねらい	幼稚園教育要領
・友達とのかかわりの中で、イメージを共有し、あそびを楽しむ。	人間関係 内容 (8) 友達と楽しく活動する中で、共通の目的を見だし、工夫したり、協力したりなどする。

Ⅳ期の環境・配慮	
・子ども同士の育ち合いが見られるような活動を工夫する。	人間関係 内容の取扱い (2) 園児の主体的な活動は、他の園児とのかかわりの中で深まり、豊かになるものであり、園児はそこでお互いに必要な存在であることを認識するようになることを踏まえ、一人一人を生かした集団を形成しながら人とかかわる力を育てていくようにすること。
・それぞれの成長に気づき、お互いに喜び合えるようにする。	人間関係 内容 (7) 友達のよさに気づき、一緒に活動する楽しさを味わう。

上記からわかるように、〇幼稚園の年間計画の中には幼稚園教育要領の文言と共通する部分が多くあり、5領域のねらいと内容を踏まえたものになっているといえる。また、お店屋さんごっこに関する部分は、特に人間関係と言葉に関連が深いことがわかる。つまり、カリキュラム・マネジメントにおける「各領域のねらいを相互に関連させ」て「具体的なねらいや内容を組織すること」には、すでに取り組んでいるといえる。

5 お店屋さんごっこの課題

園の教育内容を見直す中で、〇幼稚園のお店屋さんごっこは従来の物を売り買いするものとは違う形で行われるようになったが、さらに改善の余地はある。今後の課題として、以下の3点が考えられる。

1つ目はお店屋さんごっこの活動が一斉保育の形で行われており、飲食店を作るという前提で教師が計画を立てメニューや作り方を決定しているということである。一般に、このように

教師が計画を立てて活動内容を決める一斉保育より自由保育の方が子どもの自主性や主体性を育てられると考えられており、そのために自由保育を中心に行っている園もある。一斉保育について保育用語辞典では「同年齢の子どもたちに同じことを、同じ方法で行うことによって、保育者が身に付けて欲しいと願うことを子どもたちが効率よく身に付け、また指導の平等につながるという利点から発想される保育が一斉保育である。」と説明されている。つまり、一斉保育は教師が身に付けてほしいと願うことや指導の平等といった保育者中心の考え方になりがちであるといえる。本園におけるお店屋さんごっこも、何のお店にするかは教師が決定しており子どもの自発的な活動ではないという点では教師主導になりやすい活動になっている。河崎(2016)が紹介している「でんしゃごっこ」の実践記録の中では、「当初は子ども達の関心から出発し、どうやって人が乗れるでんしゃが作れるかと、子どもと教師が考え合いながら進める試行錯誤の取り組みでした。でも、その後この同じ活動を、『総合活動・のりもの』という活動として位置付け三十年あまり続けているうちに、だんだんねらいや取り組みに変化が生じてきました。つまり子ども達の関心と教師の関心のずれが生じ、だんだんでんしゃをつくりあげることが目的とした教師主導の活動になっていったのです。」と述べている。つまり、ごっこ遊びが教育課程の中に位置づけられ、ねらい・内容をより組織的に設定するようになるにつれて、子どもの関心から離れていく可能性があると考えられる。

しかし、大宮(2006)が「活動形態としての一斉保育は、必ずしも保育者中心とはいいい切れない。いっしょに歌ったり、同じ活動をすることが子どもにとって楽しい時間であることも当然あり、一斉の活動がかならずしも子どもの自由感を損なうとは限らない。」と述べているように、保育者が内容を決めた活動であっても子どもが主体的に取り組み、子どもが興味や関心をもち十分に試したり考えたりすることができ、子どもの工夫が活動に取り入れられていれば、教師主導の活動からは脱却できる。また浅川(2009)は、自由保育の園と一斉保育の園の指導計画とその反省、インタビュー調査を比較した結果「自由保育A園、一斉保育B園共に、子どもも保育者も主体性を発揮している主体-主体の関係があることが示唆された」と述べ、「それぞれの園の特徴ある枠組みを生かして目の前の子どもの姿から指導計画をたてることが重要」と結論づけている。つまり、お店屋さんごっこを始めとした異年齢保育の活動を重視しているのが0幼稚園の「特徴ある枠組み」とするならば、その枠組みを作る長期計画を基にしながら目の前の子どもの姿を捉えた短期計画を作成するということを重視しなければならない。0幼稚園においても、ごっこ遊び(特にままごと)は普段の生活の中で子ども達の中から自然発生的に始まり、日常的に楽しんでいる活動である。お店屋さんごっこが保護者を招く行事として設定されているため、子どもが自発的に始めた活動ではなく教師が与えたきっかけから始まる活動である点では普段のごっこ遊びと異なるが、その中で子ども達がより活動への意欲を喚起されるような環境構成や教師のかかわりがあれば、教育的意義のあるものになる。その中で、教師が主導し過度に介入することがないようにしなければならない。

2つ目は行事のための行事になりつつあることである。0幼稚園のお店屋さんごっこは、子どもはもちろんのこと、保護者が楽しみにしており期待を寄せている大きな行事となっている。保育用語辞典には「行事は保育の高まりとして、日常生活の延長線上にとらえ、計画された日時に、特定の目標をもって行うものである」とある。また、幼稚園教育要領解説には「行事は、

幼児の自然な生活の流れに変化や潤いを与えるものであり、幼児は、行事に参加し、それを楽しみ、いつもの幼稚園生活とは異なる体験をすることができる。」とある。つまり、行事は生活の流れに沿ったものであることが求められる。〇幼稚園でのお店屋さんごっこは、年間計画の中に位置づけられ、その時期は公共の施設を使って行われる発表会の日程に左右される。つまり、前述の「特徴ある枠組み」よりさらに固定化された、変えようのない枠組みの中で時期が決定し、生活の流れがどうであれ決まった日に行われるということになる。しかしながら、お店屋さんごっこが「保育の高まり」となり、幼児が「それを楽しみ」「いつもの幼稚園生活とは異なる体験をする」機会になっていることは間違いない。よって、子どもの生活の中にどう位置づけるかということについて検討する必要があると考えられる。

また、教師の側に行事として成功させるために常に目新しいものを求める傾向があり、特に造形活動を得意としない教師にとっては、負担の大きいものとなりつつある。子どもの成長を見こして教師が献身的に努力を重ねることは大切なことではあるが、「子どものため」よりも「行事のため」となることで業務が肥大化することは避けなければならない。

3つめに、評価を改善につなげる仕組み作りが挙げられる。〇幼稚園では、教育課程に基づいて長期計画・短期計画が立てられているが、計画や実践の評価については計画の自己評価の欄に各教師が記入する形となっており、園全体での評価の集約が十分でない。本園では毎日の終礼時に一日の保育の振り返りを行うため、お店屋さんごっこについても準備の活動中・本番当日共に毎日振り返りを行っており、お店屋さんごっこの最終日には活動全体の総合的な反省について話し合う。その際に、教育内容よりも準備が遅れた等の教師自身の仕事のやり方についての反省が多く出される。また、お店屋さんごっこの活動が始まる前には教師が計画について話し合う際にも、昨年のやり方を振り返りに基づいて今年のやり方の提案は出るが、個々の教師の印象・主観に基づいた意見が主となる。

5領域を重視した教育に取り組んでおり、その考え方は指導計画に反映され、個々の教師が5領域のねらいと内容を理解して教育にあたることができるよう園内研修も行われている。また、日案も丁寧に記入されており、各教師がねらいをもって計画的に教育にあたっていると考えられる。子ども達の全体的な傾向や前述の2名の事例などからは、5領域を重視した教育が成果を上げていることは推察されるが、教師の指導・援助のあり方が十分であったか、計画段階で意識されていた5領域は実施段階でも意識されていたか、そしてその教育の成果はどのようなものだったかということについて丁寧に振り返り細かく点検することで、より充実した教育内容に改善していけると考えられる。

そのためには、お店屋さんごっこの準備の活動中や本番終了後にチェックシート等を用いて評価し、結果を共有するシステムの確立が有効であると考えられる。仲嶺ら(2017)は、保育者養成における領域意識向上の試みとして「領域シート」を提案している。これは授業改善を図るために作成されたものであるが、領域を意識した振り返りの有効な手段となっている。このような先例を参考にしながら評価項目を検討し、教育内容の改善につなげることで、現在取り組んでいる5領域を意識した教育がより成果を上げると考えられる。その際に、行事としての業務の肥大化を避けるために、簡便な方法で評価できるよう考慮しなければならない。

6 総合的考察

これまでみてきたように、5領域を重視するという方向で教育の転換が行われる中で実施された〇幼稚園のお店屋さんごっこの活動は、思いを言葉にする、他の子どもとかかわりながら遊ぶことを楽しむ、責任を果たそうという意欲をもつ等の面で一定の教育成果を上げてきたといえる。このことは、おたよりという形で保護者へ伝えられ、園の教育についての説明責任も果たされている。園児数の増加からは、このような取り組みが地域で評価されていることもわかる。また、年間計画と幼稚園教育要領を比較することで、5領域を重視して立案された指導計画に基づいて教育が行われていることも明らかになった。

その一方で、お店屋さんごっこが5領域を重視してねらいや内容を設定した年間計画に基づいて行われ、行事として大きくなっていく中で、子どもの自発性を重視した活動というより教師主導の活動になりつつあるという懸念もある。また、計画・実施を評価し、その評価を共有する方法が確立されておらず、教師の指導内容や方法が適切であったかということについての反省を組織的に改善につなげる形になっていない。このことを踏まえカリキュラム・マネジメントを確立し、教育の計画・実施をより改善するためには、領域シートのような先例を参考にしながら評価システムを構築することが課題となる。その際、生活の流れの中に組み込まれた活動であったか、教師主導の活動になっていないかという点について、特に丁寧に点検する必要がある。

新しい幼稚園教育要領においても、幼稚園教育において育みたい資質・能力は第2章に示すねらい及び内容に基づく活動全体を通して育むものであることが示されたように、幼稚園教育において5領域を重視することは今後も当然求められる。少子化の中で幼稚園経営が様々な困難を抱える中、目新しい独特な教育を標榜することよりも、幼児教育の基本に立ち返り幼稚園教育要領に丁寧に沿うことを重視する〇幼稚園の取り組みは、今後の幼稚園教育のあり方を考える上で参考にすべきものとであるといえる。

引用・参考文献

幼稚園教育要領 2008年・2017年

幼稚園教育要領解説 2008年

中央教育審議会答申、「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について」、平成28年12月21日

神長美津子、「幼児教育・保育のアクティブラーニング 3・4・5歳児のごっこ遊び」、ひかりのくに株式会社、2017年

河崎道夫、「ごっこ遊び－自然・自我・保育実践」、ひとなる書房、2015年

森上史朗他、「保育用語辞典 第7版」、ミネルヴァ書房、2013年

大宮勇雄、「保育の質を高める」、ひとなる書房、2006年

浅川蘭子、「子どもと保育者がともに主体である保育についての検討－自由保育と一斉保育の比較から－」、植草短期大学紀要10、2009年

仲嶺まり子・高濱正文・秋元文緒,「保育者養成における表現活動を通じた領域意識向上の試み」,
別府大学短期大学紀要36, 2017年9月5日

